The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	会話における引用開始前の手続き
Author(s)	伊藤, 翼斗
Citation	間谷論集. 2017, 11, p. 59-84
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89840
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

＜研究論文＞

会話における引用開始前の手続き

伊藤　翼斗

1．序論

本稿の目的は、会話において引用が使用された時に、その引用箇所が引用であると会話参加者にどのようにわかるのかについて会話分析の観点から明らかにすることである。特に、引用箇所が開始される前の段階でどのような手続きがなされているのかについて検討する。

会話においては、話し手はしばしば「今ここ」ではない人物の振る舞いや発話、あるいは出来事を「今ここ」に持ち込む。過去に起こったことを語ることや、将来起こり得ることについて説明すること、他所で起きていることに言及することなど、様々な行為において「今ここ」ではないものが「今ここ」に持ち込まれている。このような「今ここ」に「今ここ」ではないものを持ち込む行為の一つに引用がある。引用は典型的には、過去に他者が話したことを「今ここ」で再現するものであるが、過去に自身が話したことを再現することもある。あるいは、「再現する」のではなく、将来言うであろうこと、（実在するしないを問わず）今いない人物が言いそうなことを実演する際にも、引用は用いられる。将来言うであろうこと、あるいは今いない人物が言いそうなことを実演する場合、引用元となる発話は実際には存在しないが、引用として本稿では扱う。なぜなら、引用元の存在や正確な再現であるかどうかは、その発話が引用かどうかにおいて本質的な問題ではないからである。藤田(2000) は「厳密には、そのようなコトバが本当にあろうとなかろうと、それを所与のものとする姿勢でとり上げて、再現したらしく見せる（また、解される）表現」(p.17) であるかどうかが重要であると指摘しており、鎌田(2000) は更に一歩進めて、再現したように見せるか、元発話とかけ離れた引用をするかは伝達の場に適合した結果である（引用句創造

説）という旨を述べている。

さて、この引用であるが、引用を含む発話の話し手やその聞き手は一体どのように引用に該当する部分とそうでない部分を区別しているのであろうか。さきほどの藤田の引用を引き合いにするならば、「再現したらしく見せる」ことにおいて話し手はどのような手続きを踏んでいるのか、あるいは聞き手によって「再現したらしく解される」とき、聞き手はどのようなことを手掛かりにそれを判断しているのであろうか。本稿では、会話分析の「資源」という考え方をもとに、引用がどのように達成されているのかについて、特に引用が始まる前にどのような資源が配置されているのかについて明らかにする。なお、資源とは、「相互行為の中でさまざまな行為や活動を成し遂げるために利用可能で、かつ相手にとって観察可能な、言語的素材（語彙、統語構造、韻律）、発話に直接伴う非言語的素材（発話のテンポ、音の大きさ、音の長さ、音調、声質、間隙、吸気、呼気、発話の位置、など）、およびその他の身体的素材（視線、表情、頭部の向き、上体の向き、身振り、動作など）への総称」（串田 2006, pp.53-54）のことである。簡単に言えば、話し手にとっては、Xということをする時に利用可能なもの、聞き手にとっては、Xと認識するときに利用可能なもののことである。本稿において資源というときは、このXにあたるものが引用なのであり、このような資源がどのように配置されているのかを引用の手続きとして明らかにすることを目的としている。

なお、本稿の内容は社会言語科学会第36回大会で発表した内容（伊藤 2015）を大幅に加筆・修正したものである。また、資源という観点から引用発話全体を見たものとして伊藤（2016）も参照されたい。

2．引用の研究と引用標識

引用は言語学的な研究において関心の強い現象であり、近年のものだけ見ても数が多く（鎌田 2000、藤田 2000、岩男 2005、中園 2006、杉浦 2007、山口 2009、加藤 2010、藤田 2014 等）、構文の構造や話法といったしばしば見られる研究のみならず、発話行為論の視点（中園 2006）や習得研究の視点（杉浦 2007）、話し言葉を中心に扱った研究（加藤 2010）といった具合に非常に多岐に渡る視点か

ら検討されている。

本稿との関係がある言及としては砂川による一連の「場の二重性」の議論がある。砂川（1987）は「引用文は、もとの文の発言の場と当の引用文の発言の場という二つの場の、前者を後者の中に入れ子型に取り組むという形の二重性によって成り立っている文であると言える」（pp.84-85）とし、このことを指して「場の二重性」という語を使用している（砂川 1987、1988a、1988b 等）。このことは、引用内部が一つの行為を構成しており、「それ自体で発話・思考行為を直接表意できる」（藤田 2000）が、あくまで引用箇所は地の発話に組み込まれた一部分であることを考えれば、至極真っ当な指摘であると言える。ただし、砂川は引用直後に配置される「と」を引用内部のものと位置付けて議論を進めている。このことは場の二重性について考える上で大きな問題となり得るものであると筆者は考えるが、ここでその議論をすることは本稿の関心からはかなり外れてしまうので割愛し、本稿では「と」は引用外部のものとして位置付けるとだけ述べておく。場の二重性の議論は、引用の内部と外部で質的な違いがあることを述べているものであるのだが、本稿においてもこのことは前提としつつ、ではどのようにその質的な違いが会話参与者によって生み出されているのか、あるいは理解可能になっているのかを考えるのである。

これまでの先行研究では、このような課題は「引用標識」という用語によって表現されてきた。引用標識とは「～と」や「～って」などに代表されるもので、柴谷(1978) によれば「文中に埋め込まれた文がここで終わるということや、引用要素の終わりを示す役割を果たすもの」（p.47）である。なお、ここでは「終わるということ」／「終わり」を示す役割を果たすものと述べられているが、上で示したように本稿では「～と」や「～って」に関して言えば、引用外部のものと位置付けているため、厳密には引用箇所が「終わったということ」を示すものと考えている。

引用標識に関わる議論の多くが「～って」や「～と」というような引用部分の直後に使用される形式のみに焦点を当てているものである（鈴木 2007、加藤 2010 等）。これは、藤田（2014）が「引用構文として最も一般的なのは、「～ト言ウ」のような文中引用句「～ト」によるものである」（p.5）と述べるように、

引用研究は「と」や「って」を基軸に分析がなされることが非常に多く、引用標識の議論もその流れを汲んでいるためであると思われる。

しかし、実際の会話では、我々は、相手の発話において引用が開始された早い段階から（「～って」等の形式が発せられるのを待たずとも）、それが引用であることがしばしばわかる。あるいは、場合によっては、相手が引用箇所を配置するよりも前の段階で引用が配置されそうだとわかることもある。このことは、「～と」や「～って」以外にも引用箇所を引用と指し示す資源が発話のあちこちに配置されていることを意味する（この点について伊藤（2016）では集中的に論じている）。このような、引用を指し示す資源のことを本稿では二つの理由から引用標識とは呼ばないでおく。

一つ目は、引用標識が「～と」や「～って」といった引用直後のものを指す用語として理解されやすいからである。先ほどの柴谷の示した「終わるということ」／「終わり」を示すという働きも、このような引用直後を強く意識した言及であるだろう。もちろん、山口（2009）が普遍的な引用標識として「元発話との形式的類似性」、「元発話との隣接性」、「イントネーションと声質」を挙げている（p.201）ように、引用箇所を指し示す標識という、より本来的な意味で使用している場合もある。ただ、多くの研究では「～と」や「～って」を指して引用標識と述べているだけにすぎない。直接引用句の表現手法としてポーズや間投詞の使用などの「直接引用開始の表示」と、人称詞・呼称詞、待遇表現などの「ソーシャルダイクシスの活用」を指摘した鎌田（2000）は本稿の関心と非常に近いところにあるが、やはり引用標識という語ではなく「場作り」としてこれらの特徴を指している。本稿は、引用を指し示す資源は引用直後以外にもあるという考えを軸に展開するものであるので、誤解を避ける意味でも引用標識という語を用いない。

二つ目は、引用箇所を引用であると確定する度合についてである。一般的な引用標識は、それが用いられれば引用があったことがほぼ確定したものとして参与者に理解されるものを指して使われるだろう。しかし、本稿で見ていく資源については、その確定度合がそこまで高くない（引用が配置されそうだとはわかるけれども、必ず引用が配置されるわけではない等）ものも多い。その確定度合の

違いを考慮して本稿では引用の資源のことを引用標識とは呼ばないでおく。なお、資源が発話の先の展開について予示・予告する性質のことを「投射可能性」(projectability; Sacks, Schegloff & Jefferson 1974) と会話分析では呼んでいる。より正確に言うならば、「時間の進行の中で言葉が用いられているとき、ある時点までに発せられた言葉は、その発話の統語的形状(すぐ次の瞬間にどんなタイプの統語要素が発話されそうか、その発話はどんな統語構造をとりそうか、など)、その発話の種類(その発話はどんな行為を行うものになりそうか)、その発話の完了可能点(その発話はいつ完了しそうか)、を予示・予告する性質」(串田 2006 : p.53) を持つということであり、このような予示・予告を「投射」という。投射と本稿で見ていく資源の関係については第6節で言及する。

以上の理由により、本稿では引用標識という用語は用いず、単に資源という言葉を用いる。また引用の成立のために様々な資源が利用されることを、引用の手続きと述べる。

3. 分析方法

本稿では分析データとして TalkBank (http://talkbank.org/) という会話コーパス群の中の CallFriend という電話会話コーパスを利用している。電話会話は、音声的な情報のみでやり取りするため、身体的な動作を分析から外すことが可能となる。これは視覚的な情報を含めることで議論が複雑になることを避けるためである。データは 10 例で、合計 223 分程度になる。具体的なデータ名は japn1612, 1684, 1722, 1773, 4044, 4222, 4261, 4549, 6707, 6739 である。これらは日本語母語話者同士の電話会話で、コーパスの性質上、基本的にはアメリカ在住の日本人がデータの提供者となる。分析の手順は、音声を文字に書き起こし、引用がなされている部分をピックアップした後、その引用箇所が引用だとわかるための資源にどのようなものがあるのかという観点で検討した。特に本稿では、引用箇所が始まる前の段階における資源の配置について見ている。

なお、本研究では、便宜上、分析の焦点となっている発話において引用されている箇所全体のことを「引用内部」、それ以外の部分を「引用外部」と呼んでいる。つまり、たとえ引用がなされている場合でも、分析の焦点となっていない箇

所は「引用外部」として述べる。例として（1）を見る。本研究では引用の開始と終了を「　」で示している[注]（それ以外の記号については論文末尾に一覧として記載してあるので参照されたい）。

（1）[japn6739]
UがTに、電話を録音する時の手順を述べている。その手順はアナウンスの指示に従ってなされる。Uは自分の登録した番号が合っているかアナウンスで確認されたが、間違っていた。

01 U：だから「違うときにはスターを押しなさい」
02　　っていうからスターを押したのよ.
03 T：う：ん.
04 U：じゃ「もう一回電話番号入れなさい」っていう
05　　からまたも－もう一回電話番号入れたの↑ね.

ここでは01行目と04行目で引用が行われている。もし01行目の引用箇所が分析の焦点であった場合、「違うときにはスターを押しなさい」の部分が引用内部であり、01行目の「だから」と02−05行のやり取りは全て引用外部となる。また、仮に04行目の「もう一回電話番号入れなさい」という部分が分析の焦点であるときは、それ以外の箇所（01行目の引用箇所も含む）は全て引用外部とする。

以下、分析した結果を示す。

4．引用開始前の資源

引用が始まる前までに使われている資源には、引用内部と引用外部との「切り離しを明示する資源」と引用内部の「舞台設定を行なう資源」の二つがあった。以下、順に見ていく。

4．1．引用内部と引用外部との「切り離しを明示する資源」

引用が開始される直前には、しばしば発話の進行性（progressivity）を阻害す

る要素が挿入される。進行性とは会話が前へと進んでいることであり、「何も介入することなしに、ある要素から次の要素へ移動することが進行性の体現であり、また、基準でもある」(Schegloff 2007, p.15 訳は筆者による)。つまりここで述べることは、発話が前へ進むのを阻害するような要素が引用直前に差し挟まれているということである。具体的には吸気(.h)、間隙((.) あるいは(0.2)など)、長音(:)、継続音調による区切れの表示(,)、ワードサーチ(Sacks, Schegloff & Jefferson, 1974)、自己修復開始(Schegloff, Jefferson & Sacks, 1977)が引用箇所の直前ではしばしば用いられていた。このような音声的な切り離しについては、鎌田(2000)が直接引用句の前にはポーズが置かれることを指摘している。また、山口(2009)もポーズなどによって引用箇所と「引用者のことばとのあいだに明確な境界を持つ」(p.26)と述べている。ただし実際は、地の発話と引用箇所の音声的な切り離しが明確ではない場合も少なからずあり、その明確でないことが会話展開に影響を与えうるのであるが、本稿の関心からは少し逸れるため、ここではそういったケースの分析は省く。山口は更に、間投詞が引用のマーカーとして働くことも指摘している(p.201)。だが、具体例は挙げられておらず、引用開始前のマーカーなのか、引用開始後のマーカーなのかについては言及がない。鎌田も同様の指摘をしている(p.69)が、「あ」や「ほら」が例として挙げられていることから、引用開始後に用いられるものとして捉えているため、引用開始前の資源を探る本稿の関心とは逸れる。ただ、日本語においてはワードサーチが一般的に「あのー」等の間投詞によってなされることを考えるならば、山口や鎌田の述べていることは、筆者と同様の方向性を持った指摘であると言えるだろう。

以下、事例を見ていく。

(2) [japn1684]

DがEに共通の知人である男性の近況を伝えている。

→ 01 D : .h ニューヨーク来た時はね(.)「僕はニューヨーク

02 に来る」とか言ってたよ.

（3）[japn1612]

Bの乗っている車について述べている。04行目の「今の」はBが今乗っている車であるスープラ・ターボ（スポーツカー）のことである。

01B：[.hhhん [：だって－ん－ [だって－
02A： [(大体)－ [ｈｈ
03 (0.3)
04B：今のだってさ：みんな友達見たら
→ 05 .hh「お：スープラ．＝ターボ乗ってるの：」とか [言って：,
06A： [うん.

（4）[japn6707]

01R：でお母さん前の仕事もちろん辞めたんでしょう？
→ 02S：辞めたけど：,(0.2)あのう「調子よければまたm-
03 仕事行きたい」っつってるよｈｈ

（5）[japn4044]

01 J：で帰りにね：(>あたし<) 男の－子と
02 一緒に [帰ってんだけど：,
03K： [ん.
04K：うん.
→ 05 J：で .hh あの今日－「今日のさ：あのうなに：
06 .hh しｈんがおの人は何？」とかってゆったら：,

これらの例では、引用直前に発話の進行性を阻害する様々な要素が使用されている。引用の直前に（2）では間隙が、（3）では吸気が、（4）では継続音調の長音、0.2秒の間、「あのう」というワードサーチを示す要素がそれぞれ配置されており、（5）では吸気と「あの」というワードサーチを示す要素が配置された後、「今日－」という自己修復の開始がなされている。なお、この「今日－」は引用内部の修復ではあるが、元々の引用された発話で修復が行なわれていたというこ

とではなく、単にJが修復していると参与者や分析者に見なせるため、本研究では引用外部の要素として扱っている。

進行性の滞りはしばしば相手の注意を引くことになる（Goodwin 1979）。上で見てきた事例でも、上述の要素によって発話の進行性が阻害されることにより、なぜ阻害されているのかを聞き手が探るきっかけが作られることになる。その結果、これらの要素の直後へ聞き手の注意が高められることになるものと思われる。「なぜ阻害されているのか」の原因は様々あるが、その一つとして「引用が直後に配置されるから」という理由がありうるのであろう。会話における進行性の滞りはそれ自体相互行為の資源となるものであり（Schegloff, Jefferson & Sacks 1977、Goodwin 1979、西阪 1999 等）、ここでは引用の資源として用いられている事が明らかになった。

4．2．引用内部の「舞台設定を行なう資源」

引用の直前では、しばしばその引用内部での発話がどのような状況でなされたのかの設定がなされる。このことを指して、本稿では「舞台設定」という用語を用いる。典型的なものはすぐ次に見る「状況の設定」であるが、後に引用が配置される可能性が相対的に高い「先行パッケージ」を分けて見ていく。

4．2．1．状況の設定

引用が開始される前に、しばしば「誰が言ったのか」あるいは「いつ言ったのか」、「どのような場面で言ったのか」といった引用元に関わる情報が示される。このような状況設定は、引用内部の理解の成立に重要であるだけでなく、引用が配置されうると聞き手が予測するための資源となり得るものである。以下、状況の設定がなされている事例を見る。

（6）[japn4044]

→ 01 J：で：あたしが「香↑水変えようかなとか↓思うん

02　だけど：」とか言って：その当時付き合ってた人

03　に言ったら：＿

（7）[japn1612] ※（3）の再掲

01B：[.hhh ん [：だって－ん－ [だって－

02A： [（大体）－ [h h

03 (0.3)

→ 04B：今のだってさ：みんな友達見たら

05 .hh「お：スープラ．＝ターボ乗ってるの：」とか [言って：,

06A： [うん.

（8）[japn1684]

→ 01 D：.h ＞あたしこないだ＜ダニエルに電話したらさ：,

02 E：う [ん

03 D：[「＜まゆみちゃぁ：ん＞ (0.2).h 僕とポールは

04 オーシャンドームに＞¥戻ることを考えています」

05 (.) だって．¥＜

（6）では「あたしが」というように「X が」という形式を使うことで、引用内部の発話が誰によってなされたのかについての情報を引用に先立って設定している。（7）では、04 行目に「みんな友達」と複数の友達の発言であることが引用に先立って配置されている。また、「今の」車を「見た」ということによって「目撃された」状況であり、「見たら」と「たら」を使うことによって、その目撃を経てどう反応したのかに関わる発言であることが示されている。（8）の 01 行目では「こないだ」と、そう遠くない過去であることを伝えており、また、その時の状況は「電話」であること、そしてその場に出てくる登場人物は「あたし」と「ダニエル」であることが述べられている。

引用は、引用内部に非常に多くの情報を含むものではあるが、それだけでは誰が誰にいつどのような状況でなされた発話なのかがわかりにくいこともある。引用内部を聞いただけでは状況がわからない場合、直後に相手から修復を求められるかもしれず、そうなった場合にはそれまでの会話の進行を一旦ストップし、相手から求められた修復を行なわなければならなくなってしまう。引用に先立って

状況の設定をすることで、修復のためのやり取りが生じるのを防ぐことができるだろう。登場人物や時、場面の設定が行なわれれば必ず引用がなされるというわけではない。なぜなら、例えば物語が語られる際には、登場人物や時、場面の設定が先になされる（Sacks 1992）こともあるからである。しかし一方で、後に引用が配置される可能性は高まることも事実であろう。

4．2．2．先行パッケージ

状況を設定するという意味では4．2．1．で見たものと同じではあるのだが、ここで見る「先行パッケージ」は、後に引用が配置される可能性が相対的に高いという意味で、別に扱う。先行パッケージとは、過去に発話のやり取りがなされたこと示す動詞（あるいは名詞を伴った動詞）がそのやり取りを示さずに前もって使われるものであり、典型的には「言う」系の動詞が用いられていた。やり取りが行なわれたことだけを予め述べることによって、直後にそのやり取りの内実が配置されることが投射されることとなる。

（9）[japn1684]
→01 E：でルームメイトにゆったのね：,
　02 D：う［：ん
　03 E：　　［「どう思：：う？」とかゆって：.

(10) [japn1684]
→01 E：>だからあたしゆったの<. ＝「ボーイフレンドも
　02　　いるし：あたし：あなたのことよくわかんないか
　03　　ら：：」とか言って：.

（9）も（10）も「ゆった」が引用に先立って配置されている。ここで重要なのは、その「ゆった」内容に関しては「ゆった」が配置された段階ではまだ明かにされていないということである。そのことによって、その「ゆった」内容が直後に配置されることが投射されることとなる。そして、「ゆった」というのが過去

に発話がなされたことを示す動詞であるため、直後に引用が配置される可能性が４．２．１．で見た「状況の設定」よりも相対的に高くなっている。このように使われる動詞を先行パッケージと本研究では呼んでいるのである。先行パッケージは、状況を設定しつつ、直後に引用を配置することを示せるため、たとえ下降音調などを配置したとしてもターンを相手に渡すことなく維持することができるという働きがある（(10) を参照)。

先行パッケージには、「言う」系の動詞だけでも「言う」「言ってた」「言われてた」「言った（ゆった)」「言ってなかった？」「言いなさい」といった形式があり、それぞれ引用内の状況設定が異なっている。また、「言う」系の動詞以外にも、「Ｘに頼まれた／Ｘが頼んできた」「Ｘと話した」「Ｘに聞いた」「(噂を／話を）聞いた」といったものも先行パッケージとして用いられていた。その例として次のものを見る。

(11) [japn1684]

Ｅがデータ録音を頼まれた経緯を述べている。ここでは、多くのデータ協力者が必要である旨を説明しているところである。

01 Ｅ：例えば話したいからって五回も六回もでき［ないのね：¿　］
02 Ｄ：　　［できないのね¿］
→ 03 Ｅ：.hh だからその人にも頼まれたの：(.)［「もし］日本人でそうしたい
05 Ｄ：　　［うん］
04 Ｅ：人がいたら：, 誰か .h あの：(.) 教えてくれなーい¿」とか言って.

この事例では 03 行目に「その人にも頼まれたの」と、何を頼まれたのかの内実を明かされずに「頼まれた」が配置されている。このことによって直後にその頼まれた内容が配置されることが投射されることとなる。また、直後の引用では［依頼］という行為が配置されることも、聞き手にとっては観察可能となる。［依頼］という行為を担う発話が投射されるとわかれば、聞き手は引用がどのようにして終わるのかの情報も手に入れることができる。つまり、［依頼］という行為に相応しい述語と音声的特徴が利用されたときに引用箇所が終結することが、聞

き手にはわかるだろう。実際04行目では「教えてくれなーいぉ」と依頼に適切な述語と音声的特徴を持って引用箇所が終結している。

このように、先行パッケージには直後に引用が配置されうることを予告するだけでなく、場合によっては行為の予告も可能となる。その予告の正確さは、どのような動詞をどのように利用するかにかかっている。例えば、(11) でみたように「頼まれた」と言えば、その行為が［依頼］((11) においてはより精度の高い［調査者がEにした依頼］) であることはわかるだろう。他方、(9) や (10) の「ゆった」では後にどのような行為が配置されるかは漠然としているだろう。ただ、先行パッケージを使わずに引用を配置する場合に比べれば、後の引用で配置しうる行為の範囲は狭まると言える。「言う」系の動詞でも、「言ってた」「言われてた」「言いなさい」等は、「言った／ゆった」と比べて、後の引用で配置しうる行為の範囲は更に狭まる。

5．先行する引用との関係を利用した資源

会話においては、一人の話者が引用を連続して行うことも珍しくない。例えば、「こっちが「XX」って言ったら「YY」って言ってきた」のような過去のやり取りを引用する場合、あるいは引用だけで物語を構成するような場合などである。ここでは、先行する引用箇所（上の例で言うなら、「XX」の部分）あるいは引用箇所の外部の要素（上の例における「こっちが」及び「って言ったら」の部分）が資源となって、当該の引用（「YY」の部分）が投射される環境をいくつか見たい。これらの環境は4．2．で見た舞台設定をすることの一部ではあるが、先行文脈として自身の引用が既に配置されている状況という点において第4節で見てきたものとは環境の性質が異なるため、ここでは分けて見ておく。

5．1．先行する引用箇所の外部の資源

引用が連続して使用される時、先行する引用の直後で使われる動詞（典型的には「って言う」の「言う」）はしばしば発話がまだ続くことを明示的に示す特定の形式で使用される。まず具体例を見ておこう。

(12) [japn4261]

Oの職場でピザパーティーが催され、同僚が「どこどこのピザがニューヨークでは一番だ」と話していたことがOからNに伝えられた直後。

01 O：で：なんかいきなりさ：食べててさ：
02 ＞「ニューヨークのピザの味はどうだ」
→03 とか言うからさ：＜
04 「うんなんどこ行っても：：アメリカ中：
05 ピザの味なんて変わんね(h)え(h)よ(h)」
→06 (と)(h)かゆ［ったらさ，
07 N： ［うん：うんうん．＝
08 O：＝「いや違う．＝ニューヨークはアメリカで
09 一番うまい．」＝とかな(h)ん(h)かもう
10 頑として譲らないし..hhh
11 N：うんうんうんうんうん．

ここでは3行目で「言うから」、6行目で「ゆったら」がそれぞれ使われている。このように引用が複数連なって使用される場合には、それぞれの引用の直後で用いられる動詞が発話の継続を示す形式となることが非常に多い。動詞をそのように使用することによって、引用と引用の間で相手にターンが奪われる可能性を低めていると言える。なお、このような発話の継続を明示する動詞形式の使用は、それだけで後続する引用を予告するというよりも、先行する引用の内部で示されている内容がそれだけでは終わらない何かしらの特徴を持っている場合に、引用が配置される可能性が高まることを聞き手に示す働きがあるのである。この、それだけでは終わらない何かしらの特徴については、5．2．で見るのでここでは触れないでおく。

本研究が対象としているデータを見ると、このような形式として、①「言って」などの「テ」、②「言ったら」などの「タラ」、③「言うから」など「カラ」の三つが代表的なものとして挙げられる。また、同様の働きをするものとして「動詞の下降音調＋そしたら」という形式も見られた。

継続の形式以外で、先行する引用の外部の資源として挙げられるものが「AとかBとか」という形式である。これはAとBが同じような例として挙げられる場合に使われる形式（グループ・ジャマシイ 1998）であるが、Aが引用であった場合、Bも引用である可能性が高まる。また、「AとかBとか」のAとBは「同じような例」であるため、Bの側から見れば、「Aとか」という部分が舞台設定の役割を果たしていると言える。実際に使われている例は下に示す。

(13) [japn4044]
Jはアメリカに留学している。留学先にいる他の日本人達が英語を喋ろうとせずホストファミリーともコミュニケーションできずに暇でいることKに伝えた。

01 J：.hh ＞それ＜↑当たり前なの↓に：[なんか(.)＝
02 K：　　[うん.
→ 03 J：＝「＜暇だ＞」とか「＜つまらない＞」とか
04　　言っちゃって文 [句ばっか言っちゃって：,

ここでは03行目に「AとかBとか」の形式で二つの引用が連続して使われている。Aに当たるものが「暇だ」という引用であり、Bに当たるものが「つまらない」という引用で、それらの同質性は04行目で「文句」であることが示されている。

本研究で対象としたデータにおいては、このような使われ方をしている形式はこれのみであったが、「AやB」や「A。あと（他にも）B」のような並列を表す形式も同様の働きを持つのではないかと思われる。また、資源としての言及はないものの、引用が並列を表す形式で用いられていることには山口(2009) も触れており、「やれ…だの、…だの」という形式を紹介している (p.158)。この形式も上で見てきたように、引用の資源として活用されうるだろう。

5．2．先行する引用箇所の資源

先行する引用の内部で示された発話が、複数の発話によって構成される単位の一部である場合、その単位の残りの部分はしばしば引用によって示される。典型

的には、［質問−応答］の隣接ペア（Sacks, Schegloff & Jefferson, 1974）がそれにあたる。［質問−応答］のうちの［質問］が、先行する引用の内部でなされていた場合、その［応答］も引用でなされるというものである。以下がその例となる。なお、ここの事例に関しては、引用内の隣接ペアの第一部分には「→」を、第二部分には「⇒」を示している。

(14) [japn1722]

FとGの共通の知人（おそらくアメリカ人）の言葉を引用している場面。

→ 01 F：「ねあの彼女どうなった：あの細い彼女」
　02　　っていったら［さ：あ　］＝
　03 G：　　［↑う：ん.］
⇒ 04 F：＝「まあね」＞と(h)か言って＜日本人みたいに
　05　　ごまかしや(h)が¥［h h
　06 G：　　［h：：h↑h h h h h

(15) [japn6739]

アメリカの大学を卒業して日本で就職したい日本人学生と話したことについてTがUに伝えている。直前では、その大学生が日本の学生の約40%が大学を卒業しないと言っていたことが伝えられている。

→ 01 T：であた［しが「どうして」って聞いたらね[：,
　02 U：　　［う：ん
　03　［あっ−
⇒ 04 T：［「卒業しても仕事がないんです」ってさ［：.
　05 U：　　［あ：：.

(14) では01行目の引用「ねあの彼女どうなった：あの細い彼女」で質問がなされており、04行目の引用で「まあね」と応答がなされている。(15) でも01行目の「どうして」に対して04行目に「卒業しても仕事がないんです」という引用が配置され、質問と応答の隣接ペアが構成されている。

隣接ペアのような複数の発話によって構成される単位の一部が引用として使用される場合、残りの部分が引用でなされることがしばしばある。上で見た二つは［質問－応答］の隣接ペアではあるが、もちろんそれだけではなく、様々なものがある。この「様々なものがある」ということに関して二つのことを述べておきたい。一つは、大枠では［質問－応答］ではあるが、より文脈に適した特徴づけによる多様性が見られることについてである。例えば、(14) は［相手のプライベートな内容に関わる情報要求－ごまかし］という隣接ペアであるし、(15) は［説明要求－説明］であると言える。このように、文脈に適した特徴づけをしていけば、様々な隣接ペアが用いられるのではあるが、あくまでしばしば用いられる大枠という意味合いにおいては［質問－応答］の隣接ペアが利用されているということである。第二に、引用で用いられる隣接ペアは［質問－応答］だけではなく、本研究で見た分析対象では［挨拶－挨拶］、［提案－拒否］、［クイズ－回答］、［主張－反論］なども利用されており、大枠としても［質問－応答］に含められないものが少なからずあった。このような二つの意味で、様々な隣接ペアが利用されているのである。

以上のことは、隣接ペアの第一部分が引用でなされた場合に、第二部分でも引用がなされる可能性が高まるということであり、第二部分にあたる箇所から見れば、第一部分で引用が用いられているということは、第二部分が引用であると観察可能にさせる資源となりうるものであると言える。前節で述べた「それだけでは終わらない何かしらの特徴」と関わらせて述べるならば、隣接ペアの第一部分が引用という形で配置された場合に、それだけでは発話は終われず、第二部分が配置されて初めて発話が終わる要件を満たすことになるということでもある。

上で見た例は「複数の発話によって構成される単位」が隣接ペアのものであったが、それよりも大きな単位になることもある。例えば下の会話では、複数の引用で「物語」が構成されているものである。

(16) ［japn1722］
直前では、Fは恋人と毎日会っているとGに伝えている。

て見てきた。引用が開始されて早い段階で、あるいは引用が開始される前から、聞いている発話に引用が配置されていることが聞き手にわかるのは、これらの資源を聞き手が利用しているからであろう。もちろん、本稿で見たのは引用が開始される前の資源であって、引用が開始されてからも当該箇所が引用であることを指し示す資源はある。聞き手は当然後者の資源も利用することとなるだろう。

引用が配置されることが前もってわかるというのは、上に見てきた資源が引用を投射していることを意味する。ただ、一般的に投射という用語は何らかの特徴が確実に配置されることを先行する項目が予示・予告することを指して用いられるように思われる。投射したことが後に配置されないということも当然あるが、そのこと自体が会話の中で焦点化されることとなってしまう限り、やはり「確実に」ということが前提にあるだろう。一方、本稿で見てきた引用の資源については、直後に引用を配置することをそこまで正確に予示・予告するものであるわけではない。４．２．２．で見た先行パッケージなどは投射と言って差し障りないものと言えそうだが、それ以外は予示・予告の「確実さ」にかなり差があり、「確実さ」のグラデーションを形成しているように思われる。仮に、投射に「確実さ」という観点から強いものと弱いものがあるとするならば、先行パッケージは引用が配置されることを強く投射していると言え、また、区切りを明示することなどは投射の度合いが弱い、あるいは、緩やかに投射しているとでも言えるものである。この緩やかな投射はあくまで直後に引用が配置される可能性を高めるものである。それがあることによって、後続部分が膨大な可能性に開かれたものではなく、いくつかの絞られた可能性のうちのいずれかが配置されることを示すもの、それが緩やかな投射であると考える。

本稿で見てきた様々な資源は、多くの場合、引用が配置される際にたった一つだけ用いられるというわけではなく、複数用いられていたことは、提示した事例からもわかるだろう。聞き手はこれらの複数の資源を手掛かりに、直後に引用が開始されそうだということ、あるいは、今始まった言葉は引用であるということを認識しているのである。ただし、投射の度合いが弱い引用の資源だけ用いられた場合、その認識に至らないことや、その認識に確信が持てないこともあるだろう。このような聞き手には、本稿では分析しなかった「引用内部の資源」および

「引用箇所の直後の資源」がまだ認識を支える手段として残されている。

7．結論

本研究では、発話における特定の部分が引用であると示す資源にはどのようなものがあるのかについて、その引用が始まる前までの段階に限定し、その手続きについて分析した。その結果、引用内部と引用外部の切り離しを明示する資源、および、引用内部の舞台設定を行なう資源の大きく二つがあることが明らかになった。これらの資源は、直後に引用が配置されることを「確実に」示すものではない。しかし一方で、引用が配置される可能性を高めるものであることは間違いないだろう。これらの資源を配置する手続きによって話し手は引用箇所に移行する。また、これらの資源を利用することで、聞き手は当該部分が引用であると推測しながら聞くことができるのである。

本研究では、引用が始まる前までの段階で用いられる手続きのみを検討したが、実際には、引用内部で用いられる手続き、引用が終了した後で用いられる手続きもあり、これらの利用も特定の箇所が引用であると参与者にわかるための重要な要素であると言える。これらは別稿で検討する。

注

本稿では引用の開始および終了をあらかじめ「　」という記号で指しているが、これはピッチや強調、声色などの音声上の変化、ダイクシス、発話の冒頭や末尾に配置される言語要素の有無など様々な観点から決定している。本来は音声が一音一音進行していく中で決定されるべきものである。その決定の際にどのような資源が利用されているのかが本稿で明らかにしようとしていることであり、先ほど挙げた「　」をつける基準も、本来は本稿では見ていない引用内部と引用終了後の資源の分析が済んで初めて言及できる類のものである。あくまで読者に読みやすくするための便宜上のものと理解されたい。

トランスクリプト記号一覧

.	：下降調の抑揚
,	：継続調の抑揚
?	：上昇調の抑揚
¿	：弱めの上昇調の抑揚
!	：弾むような音調
＜文字＞	：発話の速度がゆっくり
＞文字＜	：発話の速度が速い
↑	：直後の急激なピッチ上昇
↓	：直後の急激なピッチ下降
(秒数)	：誰も話していない間の秒数
(.)	：ごくわずかの間
°文字°	：「文字」が小声でなされたことを示す
＝	：前後が途切れなく続く
¥文字¥	：笑いながらに近い発話。
文(h)字	：呼気を含んだ笑い。
[ ]	：重複の開始と終わり
文h字	：呼気を含んだ発話
文字－	：直前の語や発話の中断
文字	：平板調
文字：	：直前の音の引き伸ばし
h .h	：呼気と吸気
→	：分析の焦点
<u>文字</u>	：強調
((文字))	：文字化者による注釈や説明
(文字)	：聞き取りが不鮮明
(…)	：聞き取れない箇所
(A／B)	：AまたはBと聞こえることを示す。聞き取りが不鮮明な際に使う。

参考文献

伊藤翼斗(2013)「「始まり」のリソースとしての発話冒頭要素」『EX ORIENTE』20 大阪大学言語社会学会 pp.67-90

伊藤翼斗(2015)「会話における引用はなぜ引用だとわかるのか」『社会言語科学会 第三六回大会発表論文集』社会言語科学会 pp.146-149

伊藤翼斗(2016)「発話の中の分散された資源 ー会話中の引用を中心にー」『社藝堂』3 社会芸術学会 pp.37-54

岩男考哲(2005)「日本語引用形式の諸相 ー「ッテ」を中心にー」大阪大学大学院言語文化研究科博士論文

奥津敬一郎(1974)『生成日本文法論』大修館書店

加藤陽子(2010)『話し言葉における引用表現』くろしお出版

鎌田修(2000)『日本語の引用』ひつじ書房

串田秀也(2006)『相互行為秩序と会話分析「話し手」と「共ー成員性」をめぐる参加の組織化』世界思想社

グループ・ジャマシイ [編著](1998)『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版

定延利之(2005)『ささやく恋人、りきむリポーター ー口の中の文化』岩波書店

定延利之(2008)「りきむ権利・りきむ義務」『日本語学』27-5 明治書院 pp.178-186

柴谷方良(1978)『日本語の分析 ー生成文法の方法ー』大修館書店

杉浦まそみ子(2007)「引用表現の習得研究 記号論アプローチと機能的統語論に基づいて」ひつじ書房

鈴木亮子(2007)「他人の発話を引用する形式」『月刊言語』36 (3) 大修館書店

砂川有里子(1987)「引用文の構造と機能 ー引用文の3つの類型について」『文藝言語研究 言語篇』13 筑波大学文芸・言語学系 pp.73-91

砂川有里子(1988a)「引用文の構造と機能 (その2) ー引用句と名詞句をめぐって」『文藝言語研究 言語篇』14 筑波大学文芸・言語学系 pp.75-91

砂川有里子(1988b)「引用文における場の二重性について」『日本語学』第七巻第9号 通巻第71号 明治書院 pp.14-29

中國篤典（2006）『発話行為論的引用論の試み』ひつじ書房

西阪仰（1999）「会話分析の練習 相互行為の資源としての言いよどみ」『会話分析への招待』好井裕明・山田富秋・西阪仰 編 世界思想社 pp.71-100

福沢将樹（2015）『ナラトロジーの言語学 表現主体の多層性』ひつじ書房

藤田保幸（2000）『国語引用構文の研究』和泉書院

藤田保幸（2014）『引用研究史論』和泉書院

山口治彦（2009）『明晰な引用、しなやかな引用 話法の日英対照研究』くろしお出版

山本真理（2013）「物語の受け手によるセリフ発話－物語の相互行為的展開－」『社会言語科学』16（1） pp.139-159

山本真理（2014）「物語の受け手によるセリフ発話：参与者間の共感関係の構築に関する会話分析的研究」博士論文 北海道大学

Goodwin, C. 1979. The Interactive Construction of a Sentence in Natural Conversation. In G. Psathas(ed.), *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology*. New York: Irvington, pp.97-121.

Holt, E. and R. Clift(eds.), 2007. *Reporting Talk, Reported Speech in Interaction*. Cambridge University Press.

Jefferson, G. 1972. Side sequences. In D. Sudnow(ed.), *Studies in Social Interaction*. New York: The Free Press. pp.294-338.

Jefferson, G. 1978. Sequential Aspects of Storytelling in Conversation, in J. Schenkein (ed.). S*tudies in the Organization of Conversational Interaction*. Academic Press.

MacWhinney, B. 2007. The TalkBank Project. In J. C. Beal, K. P. Corrigan & H. L. Moisl (eds), *Creating and Digitizing Language Corpora: Synchronic Databases*, Vol.1. Houndmills: PalgraveMacmillan

Sacks, H. 1992. *Lectures on Conversation*, 2 vols. Oxford: Blackwell.

Sacks, H., E. Schegloff, and G. Jefferson. 1974. A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language* 50(4): pp.696-735.

Schegloff, E. A. 2007. *Sequence Organization in Interaction: A Primer in Conversation Analysis 1*, Cambridge: Cambridge University Press

Schegloff, E. A. 2001. Getting Serious: Joke → Serious "No." *Journal of Pragmatics* 33(12):

pp.1947-1955

Schegloff, E. A., Jefferson, G. & Sacks, H. 1977=1990. The preference for self-correction in the organization of repair in conversation, In G. Psathas(ed.), *Interaction Competence*, Washington, D. C.: University Press of America. pp.31-61.

〈キーワード〉 会話分析　引用　資源

Procedure before Quotes in Conversations

ITO Yokuto

This study aims to present resources for indicating where the quotation marks are in an utterance and to clarify the procedure before the quotes in conversations. For achieving this objective, the author analyzed data of the TalkBank corpus with the conversation analysis approach. As a consequence, in the data, mainly two resources used by conversation participants are identified: 1) those indicating separation of the inside and outside of a quote and 2) those setting the stage of the inside of the quotation. All these resources do not indicate with certainty the quotation section immediately after. However, they do make it a possibility for the quotation to appear. The speaker often moves to the quotation section in an utterance by using these resources. Using these, the listener can recognize that the part concerned in an utterance is a quotation.